

プログラム・ノート

上田泰史

グリーク：アンダンテ・コン・モート ハ短調

弦楽四重奏曲 作品27(1877～78)の直後に書かれた室内楽で、没後に発見され陽の目を見た「遺作」である。ピアノ三重奏曲の緩徐楽章を成す予定だったとみられ、1878年6月17日に「完成」したが、エドヴァルド・グリーク(1843～1907)本人は満足せず計画は頓挫したようである。彼の没後、妻ニーナが夫の友人ユリウス・レントゲン(1855～1932)に意見を求めたところ、出版の価値ありとの結論に至ったが、初版は作曲者の死後、1978年を待たねばならなかった。1908年にレントゲンらによって初演された。ロンド・ソナタ形式で書かれ、レチタティーヴォ風の主題と半音階の多用が深い悲しみを表現する。リフレインは提示部では変ホ長調、再現部ではハ長調で示され、明暗のコントラストがくっきりと付けられるが、最後は葬送の足取りで閉じられる。

ラヴェル：ヴァイオリン・ソナタ(遺作)

本作も「遺作」で、モーリス・ラヴェル(1875～1937)がパリ国立音楽院の学習時代に書いたソナタの第1楽章である。1889年、彼はパリ国立音楽院ピアノ科に入学したが、修了には至らなかった。1898年1月、同音楽院に再登録するが、今度はガブリエル・フォーレ(1845～1924)が受け持つ作曲のクラスと、アンドレ・ジェタルジュ(1856～1926)の対位法・フーガのクラスに籍を置いた。本作はジェタルジュの個人指導を受けていた前年の4月に完成されている。この習作は、楽譜で迎えることのできる彼の最初の室内楽作品である(最後の室内楽も有名なヴァイオリン・ソナタ)。形式や転調の手法はフォーレを範としつつ、独自の半音階的色合い、控えめではあるがフラジオレットの使用など音色探求の萌芽も見られる。

フォーレ：ピアノ三重奏曲 ニ短調 作品120

晩年のフォーレは難聴を患い活力を失っていくが、書法は洗練の度を増した。限られた音が紡ぎ出す線が織りなす透明な書法の極地は、弦楽四重奏曲 作品121(1923～24)に現れている。演奏頻度こそ劣るものの、本作もまた、純度の高いフォーレ晩年の様式の結晶として見過ごせない。出版人デュランの勧めにより、1922年から翌年にかけて書かれた。**第1楽章**：ニ短調、ソナタ形式。ドリア旋法を基調とし古典的な巧緻さで全体を構成しつつも、予想出来ない和声如玉虫色に輝く。**第2楽章**：ハ長調。明るい平穩の中に高まりを感じさせる美しい緩徐楽章。**第3楽章**：ニ短調—ニ長調。ロンド風の形式で、調のみならず諸動機と伴奏音型の組み合わせが絶えず変化する。

J. S. バッハ(サン＝サーンス 編曲)：無伴奏ヴァイオリンのためのバルティータ第1番 短調 BWV 1002 より 第4曲「テンポ・ディ・ブーレー」

希代のピアノの名手だったカミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)は、14曲のヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)作品をピアノ独奏用に編曲している。うち12曲は2巻のバッハ

作品に基づく『トランスクリプション集』(1862、1873刊)に収められている。

本編曲はこのシリーズの第1巻第4曲に位置し、1862年1月17日に、サル・プレイエルでサン=サーンスにより初演された。ヴァイオリン独奏曲をピアノ用に編曲するにあたり、原曲の流れを保ちつつバスと対旋律を付すなど、彼の仕事はトランスクリプション(「書き写し」)をはるかに超えている。加筆を行うこの種の創造的編曲は、原曲の真正性を重視する立場からは殆ど無視されてきたが、現代見返すと、音楽家にとって学ぶところの多い珠玉の編曲である。

J. S. バッハ(サン=サーンス 編曲): 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第3番 ハ長調 BWV 1005 より 第3曲「ラルゴ」

上述の『トランスクリプション集』第2巻に収められている。第1巻からの通し番号では9番目にあたる(9番は2曲あり、「ラルゴ」は9Aに当たる)。ヴァイオリン曲をピアノで弾くことの意義は、すでにサン=サーンスのピアノ教育上の「祖父」(師匠の師匠)にあたるフレデリック・カルクブレナー(1785～1849)が強調している。鍵盤楽器を想定していない楽曲を取って弾くことで、新たな運指法や表現の可能性を開拓することができたからである。サン=サーンスはその問題を完全に克服した上で、バスと対旋律のみならず、和弦的な伴奏パートを付け加えながら、原曲とは別種の気品を生み出している。親交があったチェコ出身の女性ピアニスト、ヴィルヘルミーヌ・サルヴァディ夫人(1832～1907)に献呈。

サン=サーンス: 組曲『動物の謝肉祭』より 第13曲「白鳥」

『動物の謝肉祭』の名曲「白鳥」は、種々の編成による14曲からなる組曲で、1886年3月9日に歌手のポリヌス・ヴィアルド夫人(1821～1910)宅で初演された。謝肉祭は教会暦の四旬節(この時期は肉食や歌舞音曲を控える)に先だつお祭り騒ぎでもあり、灰の水曜日に始まる。1886年の四旬節は3月10日に始まるので、その直前に初演されたことになる。余興的作品だったためか、生前、作曲者は「白鳥」以外の曲の出版を認めなかった。但し「白鳥」は絶大な人気を博し、パレエ版や、編曲が多数制作された。美しい名曲とはいえ、その人気は作曲者自身さえ戸惑わせるほどで、本作が彼の他の室内楽作品を差し置いて「作曲家の顔」となったのは皮肉である。

サン=サーンス: ピアノ三重奏曲第1番 へ長調 作品18

サン=サーンスの見事な室内楽の数々は「白鳥」の人気の影に隠れている。弦楽四重奏曲は晩年まで書かなかったが、ピアノを含む編成は早くから手がけている。ピアノ三重奏曲は2作(作品18と92)あり、本作は1864年に完成され、翌年1月に初演された。パストラーレを想わせるへ長調と随所で聴かれる五音音階が、野趣豊かな印象派風の響きを先取りしている。

第1楽章: 2つの主題を単一のモチーフで統一した晴朗なソナタ楽章。**第2楽章:** フランス風序曲と葬送行進曲を混合した短調の楽章。中程に置かれる抒情的な歌唱性が主部と対照を生む。**第3楽章:** スケルツォ。雫のようなスタッカートが活用される。**第4楽章:** 提示部を反復するソナタ楽章。第1楽章と第2楽章のモチーフ、第3楽章のスタッカートが楽曲全体の色合いを1つの景色にまとめ上げる。

(うえだ やすし・音楽学)